

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02784

研究課題名(和文)連用節の意味および機能の相互関係に関する記述的研究

研究課題名(英文)A Descriptive Study of the Interrelationships among Meanings and Functions of Compound Clauses in Contemporary Japanese

研究代表者

前田 直子 (Maeda, Naoko)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：30251490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：これまで、複文の連用節は、その意味的な分類や構造的な特性の研究が中心であり、他の文法項目との関係については、主節に現れる意味的な共起制約・選好や、ボイス(受身・使役)を除いて、積極的に取り上げられてこなかった。しかし、本研究では、主節のみならず従属節に現れる様々な文法カテゴリーとの関連に着目し、中でも他言語に比べて特徴的な日本語の授受表現、可能表現、敬語表現の出現と使用について、コーパスから収集したデータに基づき実証的に分析した。これにより、従属節の意味・分類について、また条件節と可能表現、継起節と授受表現、授受表現と敬語表現の関連について、新たな文法的・意味的・機能的な特徴を記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は現代語の記述的な文法研究をさらに発展させるものである。本研究は、複文と文法カテゴリーの相互研究として、複文については条件節と継起節、文法カテゴリーについては、授受表現、可能表現、敬語表現を取り上げることとなった。本研究により、これらの複文・文法カテゴリー研究に新たな記述的成果を提示するとともに、文法項目の相互関係を研究することの重要性が示された。また現代語の記述的研究は言語学のみならず、日本語教育への大きな貢献となる。本研究も一部のデータとして非母語話者の産出した日本語を参照し、研究を進めた。本研究の成果が今後、教材や教授資料などとして教育現場で実用的に活用されていくことが期待される。

研究成果の概要(英文)：Until now, the study of compound clauses has mainly focused on their semantic classification and structural properties, and their relations with other grammatical categories or items have not been actively addressed, except for co-occurrence constraints and preferences of semantic or grammatical items like voice (e.g. passive and causative) in main clauses. In this study, however, we focused on the relationship between some grammatical categories appearing in not only main clauses but also subordinate clauses, and analyzed on data collected from corpora. The items we addressed are Japanese Giving and Receiving expressions, Potential Expressions, and Honorific Expressions, which are more distinctive than those in other languages. In this study, we described grammatical, semantic, and functional features of the meaning and classification of subordinate clauses, the relation between Conditionals and Potential, Sequential and Giving/Receiving, Giving/Receiving and Honorific Expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：複文 従属節 副詞節 条件節 継起節 授受表現 可能表現 敬語表現

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 意味分野の横断の必要性 … 従来、副詞節・並列節(両者を合わせて連用節と呼ぶ)の研究は、「原因・理由」「条件」「時間」「目的」等の「意味」分野ごとに記述されてきた。そして1つの形式が複数の意味分野において使用されたり、あるいは異なる意味分野に属する形式(複文)が類義の文として機能したりすることがあることも広く知られていた。これまでは、こうした例の「違い」あるいは「使い分け」をどのように分析し、記述するかが複文研究の大きな課題であった。

(2) 従属節の文法カテゴリーへの着目の必要性 … 一方で、本研究は、意味分野の枠にとらわれずに複文(従属節)を研究する新たな方法の模索を試み、同一の意味分野における諸形式の比較が中心であった従来の研究を超えて、意味分野相互の関連を明らかにすることを目指した。その結果、複文の従属節に出現する文法カテゴリーと複文形式との関連が重要であることが明らかになってきた。またそれにより、それぞれの文法カテゴリーについても新たな発見が見いだされることもわかった

(3) 対象の確定 … こうした過程を経て、本研究は、複文については副詞節(主に条件節)と並列節(主に継起節)について、また文法カテゴリーとしては授受表現・可能表現・敬語表現を取り上げることとなった。後者のうち、特に授受表現と敬語表現は日本語の文法にとって大きな特徴と考えられているが、複文の記述・分析においても重要な役割を果たしていることが明らかになった。

2. 研究の目的

本研究は、従来、「意味」分野ごとに記述されてきた日本語の連用節の新たな研究・記述の方法を模索することを目的とする。その際、従来注目されてきた主節の文法カテゴリーに加えて、従属節に出現する文法カテゴリーに注目する。従属節において文法カテゴリーがどのようなふるまいをするか、それらが連用節の意味や機能にどのような影響を与えるかを明らかにする。この新たな記述が文法研究のみならず日本語教育にも役立つことも視野に、分析・記述を行う

3. 研究の方法

(1) 従来の複文研究の流れを整理するために、先行研究の分析を行う

(2) 連用節のうち、代表者がこれまで中心的に取り組んできた副詞節(特に条件節)と、並列節(特に継起節)について新たな現象を探る

(3) 各形式について、国立国語研究所による「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「日本語ウェブコーパス」「日本語話し言葉コーパス」「日本語日常会話コーパス」「名大会話コーパス」「現日研・職場談話コーパス」「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を活用し、必要なデータを収集する。

(4) 用例分析の中で得られた知見として、授受表現・可能表現・敬語表現に注目すべきことが明らかになった。よってこれらの文法表現に関して、(3)のコーパスを活用し、同様にデータを収集する。

(5) 上記(3)と(4)のデータを照らし合わせ、記述・分析を進める。

4. 研究成果

(1) 2017(平成29年度)年度は、3つの研究を予定通り実施・発表した。まず、これまでの複文研究・複文の分類の歴史を整理した。これについては、12月に単著論文『基本文型の研究』における条件文の分類(『時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈』ひつじ書房)を発表した。

(2) 第二に、意味的な研究を参考に、また実例を観察しつつ、事例を幅広く集め、どのような意味分野同士に接近が見られるかを、網羅的に調査する:これについては、大学院生の協力を得て、接続助詞資料を収集した。本年度は「標準語」が使用され、言語使用にゆれがなく安定している現代の散文(近現代の小説)をデータに用例を収集した。

(3) 第三に、具体的な表現形式として、「～ば～ほど」に関する記述を進め、8月21日に東京外国語大学において「日本語教育と複文研究 - 「～ば～ほど」と「～ば～だけ」をめぐって - 」を口頭発表した。この発表では、条件接続辞「ば」を含む複合辞の中で、研究がそれほど進んでい

ない「～ば～ほど」「～ば～だけ」それぞれの意味・機能を記述し、両者の意味的・文法的な違いについて分析・考察した。

(4) 2018(平成 30)年度は、6 項目を予定通り実施し発表した。まず、前年度に引き続き、異なる意味分野に属する複文形式が同一の文脈に出現する事例(例:部屋に入ると、上着を脱いだ。←→部屋に入って、上着を脱いだ)を網羅的に採集するために、現代日本語の評論文(日常レベルの客観的な文章)の例文調査を行った。ここで採集したデータは以下の研究において使用している。

(5) 第二に、上記のデーに基づき、時間節と条件節の接近(例:父が帰ってきたら、聞いてみよう。←→父が帰ってきた時に、聞いてみよう。)を調査するために「たら」節の分析を行った。また、これらの調査の中間報告として、夏季に行われる国際学会での研究発表を当初の目標通り行うことができた。本年度にはまず条件表現のこれまでの研究と、今後の方向性に関して、研究発表を行った:「文法研究・文法教育における新たな視点:条件表現の使い分け」(Japon Dili ve Eğitimi Uluslararası Sempozyumu - JADEUS 2018 日本語教育国際シンポジウム、2018.6.21-22、カイセリ:トルコ)。この発表は次に論文として掲載された:「文法研究・文法教育における新たな視点」ATAY,Ayşegül(ed.)Japon Dili İncelemeleri (日本語学諸論究)。JDI Serisi .Transnational Press London. pp.1-14)。

(6) 第三に、条件節の調査において、授受動詞の使用が深く関わる事が明らかになり、次の発表を行った。「授受動詞の使用実態と教室指導の工夫:条件表現との関係から(ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会 Venezia ICJLE 2018、2018.8.3-4、ヴェネツィア:イタリア)

(7) 第四に、条件節のみならず、連用節の使用において深く関わる授受表現および助詞の問題を次で発表した:「多文化・多言語共生社会における日本語教育研究(東京外国語大学 2018 年度連続講演会 国際日本学がめざすもの:その多面性と可能性(第三回)、2018.11.30)。

(8) 第五に、条件節の調査に関して、母語話者対象のアンケート調査と日本語教科書の分析を行い、発表した:「条件表現「と・ば・たら・なら」の提示方法:母語話者の作成文と教科書の例文の比較(第 12 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「多言語世界における日本語教育の変遷」、2018-12.8-9)。

(9) 第六に、日本語学習者の条件節の誤用を分析し、条件節の意味的な使い分けの問題は、可能表現との関わるが大きいことについて考察し発表した:「日本語教育のための「と」「ば」「たら」「なら」の使い分け再考(実在の誤用に基づく類義表現研究会 第 6 回 研究発表会、2019.1.26 日本学生支援機構大阪日本語教育センター)。

(10) 2019 年度は本研究の最終年度であり、これまでの 2 年間の研究成果をまとめることが目標であった。また 2019 年度、代表者は勤務校より 1 年間の長期研修の機会を得、国内外の様々な学会・研究会・大学・研究機関を訪問する機会を持った。まず、日本語初級学習者を対象にした講演(「現代日本語の表記と文法」中華人民共和国・杭州市杭州富陽区実験中学(5月11日))において、日本語の表記と助詞の関係を発表した。

(11) 昨年の発表(8)を発展させ、日本語教育研究者を対象に、次の発表を行った:「日本語教育のための現代日本語文法研究再考—条件表現「と・ば・たら・なら」の教え方を母語話者の作成文と教科書の例文の比較から考える」早稲田大学日本語教育研究科(7月25日)。

(12) 条件節・授受表現を中心に学習者の誤用を分析する方向性を探るために、国際学会において、ワークショップを主催した:「多文化社会における表現リテラシーを考える - 学習者の日本語をどこまで許容するか - 」(ワークショップ:高梨信乃・高橋美奈子と共同発表)2019CAJLE (カナダ日本語教育振興会)年次大会、カナダ・ヴィクトリア大学(8月6日)。

(13) 継起節(テ形節)と「は・が」の問題に関する分析を発表した:「日本語文法と日本語教育 - テ形の作り方と「は・が」の違い - 」ミャンマー・国際交流基金ヤンゴン日本文化センター(8月19日)。

(14) この 3 年間の研究を踏まえ、日本語文法全般に関わる概説書 2 冊を分担執筆した。一点は『日本語学入門』滝浦真人編著(放送大学教育振興会)執筆担当・第 7~9 章(2020.3.20 発行)、もう一点は『やさしい日本語のしくみ - 日本語学の基本—改訂版』(くろしお出版)庵功雄・日高水穂・山田敏弘・大和シゲミと共著、執筆担当 8,11,16,21,25,27, コラ 5(2020.4.1 発行)である。こうした日本語文法全体に関わる研究をまとめる機会を得た一方で、年度の後半から世界的に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、研究の取りまとめの段階が、予定通り信仰で

きなかった。そのため、1年間の延長を申請することとした。

(15) 2020年度は、本研究の最終年度となった。年度の前半は全国的に様々な研究活動が停滞していたが、後半はオンラインを活用した学会・研究会が行われるようになり、本研究も2回の研究発表を経て、4件の研究論文を発表した。2020年度は、まず連用節のうち条件表現について、昨年度アルバイト補助者により収集されたコーパスからの用例も活用し、改めて全般的に整理・体系化した。その成果は「第8章 条件表現」(井島正博編・前田直子他著『現代語文法概説』朝倉書店・2020.11.1・pp.89-104)として発表した。

(16) 従来は単独で研究されていた連用節を、他の文法項目との関係の観点から整理することに取り組んだ。具体的には、連用節としては条件節、他の文法項目としては可能表現、敬語表現、授受表現を取り上げ、それらの意味と機能の相互関係について実証的に論じ、次に発表した:「条件表現4形式使い分けルールの簡略化 - 日本語教育のための日本語研究をめざして」『日本語文法』20-2(2020.10・pp.40-56)。

(17) 敬語表現が複文継起節に関わることを次で発表した:「敬語表現と文法 - 授受動詞の用法を中心に」『待遇コミュニケーション研究』第18巻(2021.2・pp.52-67)。

(18) 授受表現が複文継起節に関わることを次で発表した:「授受動詞の使用実態と教え方」『新世紀人文学論究』第5号(2021.3.28・pp.23-36)。従来、複文はその分類や構造的な特性の研究が中心であり、他の文法項目との関係については、主節に現れる意味的な共起制約・選好や、ボイス(受身・使役)を除いて、積極的には取り上げられてこなかった。しかし、本課題の4年間の研究を通じて、従属節と文法カテゴリー(あるいはそれを超えた語用論的なカテゴリー)の組み合わせを適切に抽出することにより、従属節と文法項目の双方に対し、従来には気づかれなかった意味的・文法的な特徴を見出すことができることが明らかになり、引き続き、この方向をさらに発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 前田直子	4. 巻 20-2
2. 論文標題 条件表現4形式使い分けルールの簡略化 - 日本語教育のための日本語研究をめざして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 18
2. 論文標題 敬語表現と文法 授受動詞の用法を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 待遇コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 5
2. 論文標題 授受動詞の使用実態と教え方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 20-2
2. 論文標題 条件表現4形式使い分けルールの簡略化 - 日本語教育のための日本語研究をめざして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 18
2. 論文標題 敬語表現と文法 授受動詞の用法を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 待遇コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32252/tcg.18.0_52	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 5
2. 論文標題 授受動詞の使用実態と教え方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 4
2. 論文標題 文法研究・文法教育における新たな視点	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japon Dili Incelemeleri (日本語学諸論究)	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 前田直子	4. 巻 単行本
2. 論文標題 「条件接続形式「くらいなら」と認知的条件文」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語条件文の諸相-地理的変異と歴史的変遷	6. 最初と最後の頁 59-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 単行本
2. 論文標題 逆接条件文「テモ」文の「モード」をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 語彙論的統語論の新展開	6. 最初と最後の頁 185-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田直子	4. 巻 単行本
2. 論文標題 『基本文型の研究』における条件文の分類	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 時間の流れと文章の組み立て-林言語学の再解釈	6. 最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 高梨信乃・高橋美奈子・前田直子
2. 発表標題 多文化社会における表現リテラシーを考える - 学習者の日本語をどこまで許容するか -
3. 学会等名 2019CAJLEカナダ日本語教育振興会年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田直子
2. 発表標題 文法研究・文法教育における新たな視点
3. 学会等名 Japon Dili ve Egitimi Uluslararai Sempozyumu: JADEUS 2018日本語教育国際シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田直子
2. 発表標題 授受動詞の使用実態と教室指導の工夫
3. 学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会 Venezia ICJLE 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田直子
2. 発表標題 多文化・多言語共生社会における日本語教育研究
3. 学会等名 東京外国語大学 2018年度連続講演会 国際日本学がめざすもの：その多面性と可能性 第三回 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田直子
2. 発表標題 条件表現「と・ば・たら・なら」の提示方法：母語話者の作成文と教科書の例文の比較
3. 学会等名 第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「多言語世界における日本語教育の変遷」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田直子
2. 発表標題 日本語教育のための「と」「ば」「たら」「なら」の使い分け再考
3. 学会等名 実在の誤用に基づく類義表現研究会 第6回 研究発表会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 井島正博編著、井上優・大島資生・岡崎友子・鴻野知暁・定延利之・沼田善子・野田春美・野田尚史・早津恵美子・前田直子・宮崎和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 171
3. 書名 現代語文法概説	

1. 著者名 井島正博（編）前田直子他（著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 171
3. 書名 現代語文法概説	

1. 著者名 滝浦真人編著、石黒圭・衣畑智秀・前田直子・澤村美幸 分担執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 256
3. 書名 日本語学入門	

1. 著者名 庵 功雄、日高 水穂、前田 直子、山田 敏弘、大和 シゲミ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 112
3. 書名 やさしい日本語のしくみ 改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------